

NOTICIAS DO BRASIL

Diretor Responsável SANEMI HARADA

Diretor Adminis. e Proprietário SEISAKU KUROISHI

Fundado em 1917

Redação, Administração e Oficina: Rua Caramuru, 63 — Caixa Postal, 3148 — São Paulo

N.º 2.923

ANO XXXII

SÃO PAULO, Segunda-feira 31 DE OUTUBRO DE 1949

Circula às Segundas, Quartas e Sextas

「話りだね。良いことなど
うかつて聞いてるんだよ」
「恩、絶対に悪いと思ふわ
だつて相手が外人で、しか
も黒ん坊ぢやない。私、
厭だわ」

「若し、日本人であつたら
どう思ふね、春子……」
「いくも、日本人の方であ
つても、かけ離なん……」
「悪い、悪いと語ふんだ
ね。そう、お前はそう思つ
てくれたね。でもねばる子、
今までの娘たちの心は判
らないで。しつかりした
者だと云はれる娘が、畢竟
黒ん坊と逃げて行くからね
どうう？」

「いや、お前のことを云つ
ておられるのぢやないよ。ほほ
を試されたような気がして
あわてゝ遮る。

「あら、眼な母さん……」
何だか、痴曲に自分の心
ほ：お前は、しつかりして
いないからね、ほほ……」
と、笑ひに紛らす。

般鑑述からず外人の雇
人を使つてゐるので、はる
子の心を反省するべく、
時々そしして話を題にする。
成る日のことである。樋
宮傳助は、蒼程とした感覚
は明るく澄んで、人生至上に
於ける意き青春時に、醸さ
んなど意氣込みの裏
身をもつて春子を嫁がせし
と、單刀直入に話しこみ
所謂、膝詰談判の最後とも
いふべきであった。

春子の嫁入の儀式も、
その面には、念願の意志を
貫徹せしめねばおかれぬ而
しから、重蔵夫婦も、
嫁入の儀式を許さざるを得なか
れども、親・母・娘の心を
察する限り、親切の心情であ
らう。

春子の嫁入の儀式は、
嫁入の儀式を許さざるを得なか
れども、親・母・娘の心を
察する限り、親切の心情であ
らう。

小説世相の蔭に

五十一

嵐和生

(五)

活字で話してもらはう

傳助老人の一本槍のよう

言葉で、その内容は判つ

たし、こつちでも困んでい

たことなので、況して、双

方の家もよく知悉してゐる

ので、世の人のように、我

が子を高く評價せんとする

卑しい心の現はれともいふ

べき面倒がましい押當は

いたくなつた。どうせ娘

はやるものであつて、妻に

飾つてあるものではない。

が子を高く評價せんとする

卑しい心の現はれともいふ

べき面倒がましい押當は

いたくなつた。どうせ娘

<p